

2021-2022 フィンドレー大学福井県奨学生 月例報告書 8 月

作成者：島田 園子

作成日：2021 年 9 月 9 日

皆様、初めまして。この度、2021 年度福井県奨学生としてフィンドレー大学に留学させていただいております、島田園子と申します。福井県奨学生としてこのような素晴らしい留学の機会を頂けたことを心から感謝しております。日々進歩していけるよう、精一杯努力して参りたいと思います。

【フィンドレー大学での授業】

私が現在受講している授業は、英語（writing）、演劇の授業 3 つ（acting, directing, theater literature）、コーラス、元気キッズ（現地の小学生に日本文化を伝える授業）です。これらの授業はいずれもマスクを着用しながらの対面授業です。

演劇はアメリカでとてもポピュラーな分野で、演劇を主専攻（major）や副専攻（minor）とする学生が多く、私が受講しているクラスにも様々な専攻の学生が集まっています。フィンドレー大学内には劇場があり、年に 4 回、学生による演劇やミュージカルが上演されます。acting の授業では、実際の脚本を演じながら、役者に求められる知識や技術を学んでいます。directing と theater literature の授業は先生を含め 4 人という少人数の授業で、一つの机を囲んでディスカッションをしています。directing の授業では、ロシアの劇作家であるチェーホフの“The Sea-Gull”という脚本の読解を通して、物語の時代背景や当時の生活様式などを調べながら人物像を少しずつ具体化し、演出の方向性を考察しています。theater literature の授業では、ギリシア悲劇から中世に至る様々な脚本を読み、プレゼンテーションをしながら当時の演劇の特徴や変遷を学んでいます。演劇の授業にはいつも新たな発見があり、非常に興味深く感じています。

やはり先生や現地の学生が話す英語のスピードに苦戦していますが、事前に予習をしっかりしていくことで乗り切っています。

授業中の発言はまだまだ足りないので、これから発言の機会を増やしていきたいと思っています。



【フィンドレーの生活】

フィンドレーに来て驚いたことは、町がとても緑豊かであることです。大学周辺には、私たち学生が住むシェアハウスと一般の住宅が混在していますが、どの家も広い庭を持ち、大きな木がいたるところに茂り、リスが走り回っています。庭先には小さなテーブルや椅子が置かれ、気持ちの良い午後にのんびりとくつろいでいる人を見かけます。



まるで絵本の中の世界のように、私もとてもリラックスして生活しています。

私はシェアハウスに住んでおり、同じ奨学生である古市さんの他にアメリカ人の学生 2 人と共同生活をしています。一緒に住んでいると、食事や趣味など様々な文化の違いがくっきり見えて面白いです。すっかり影響されて、巨大なオーブンで甘いブラウニーを焼いたら皆喜んで食べてくれました。

8月は夜9時頃まで日が暮れず、古市さんと一緒に大学の庭の一面でアメリカの国歌の練習をしたこともありました。

9月になり少しずつ肌寒くなってきました。感染に気を付けながら、これからも努力を続け、色々なことに挑戦していきたいと思います。

本報告書について質問、感想等ございましたら以下のメールアドレスまでご連絡ください。

shimadas1@findlay.edu

2021-2022 フィンドレー大学福井県奨学生 月例報告書 9月

作成者：島田 園子

作成日：2021 年 10 月 12 日

10 月に入り、気温の変化が激しくなってきました。ある日は半袖の T シャツでも暑いくらいかと思えば、あくる日は突然真冬のような寒さとなり、ダウンジャケットを来て大学まで歩いていくこともありました。この報告書を書いている今はとても過ごしやすい気温で、毎日からりと晴れて清々しく、福井の秋を思い出します。本報告書では、私が先月取り組んだ“24hours Theatre Triage”という演劇のイベント、11 月の演劇公演に向けたリハーサルについてご報告します。

“24hours Theatre Triage”というイベントは、24 時間で脚本の作成、演出、リハーサルを学生が行い、ショーを開催するというものです。イベントの参加者は 15 人ほどで、ショーの直前には 2 週間のワークショップが開催されました。そこで、短時間で短い脚本を書く練習を行い、学生が書いた脚本を実際に舞台上で演出しながら基本的なディレクターの仕事を学びました。



ショー前日夜 8 時、イベントの総監督からショーのテーマが開示され、脚本担当の学生たちがテーマに沿った脚本を約 3 時間で書き、その後は演出担当（ディレクター）の学生たちが照明や音響、衣装、小道具などの演出を考案して各技術担当と相談し、何度かリハーサルを行い、翌日の夜 8 時に本番を迎えました。私は脚本と演出を他の学生と共同で担当しました。数人で脚本を書き上げることは非常に苦勞し、また演出に関しても満足いかなかったり、自分の非力さを痛感したりと悔しいことは書ききれませんが、皆で一つの作品を創る難しさと楽しさを学ぶ良い経験となりました。ショー前日の夜は大学のシアターの中で寝泊まりです。上の写真は客席の後ろに吊るしたハンモックから撮った夜の舞台です。ハンモックで寝るのは初めてでしたが、寒くて一睡もできませんでした。

現在は、11月中旬にフィンドレー大学で開催するシェイクスピアの *The Comedy of Errors* という舞台に向けて、毎日夜7時から10時までリハーサルを行っています。演出は theatre の教授が手掛け、舞台のセットは教授と学生が毎日協力して一から作り、役者は学生です。先月行われたキャストオーディションに合格して役を頂けたので、私もキャストとしてリハーサル



に参加しています。シェイクスピアの脚本は古い英語である上、目を疑うほど長い台詞もあり、皆つまずきながら何とか演じています。脚本の読み合わせの段階では、こんなに難しい作品が果たして面白いのかと疑っていましたが、実際にステージで演じてみると、複雑なプロットやキャラクター同士の掛け合いが面白く、この作品がとても好きになりました。

来月この報告書を書く頃は、まさに本番の直前です。自信を持って直前リハーサルのご報告ができるように、本番まで日々頑張って参りたいと思います。

本報告書についてご質問、感想等ありましたら以下のメールアドレスまでご連絡ください。

shimadas1@findlay.edu



2021-2022 フィンドレー大学福井県奨学生 月例報告書 10 月

作成者：島田 園子

作成日：2021 年 11 月 11 日

秋学期も残すところ 1 ヶ月弱となりました。

先月の報告書でお話ししたシェイクスピアのショーが本日より開幕します。本報告書では、この作品やリハーサルの様子について詳しく書きたいと思います。

今回私たちフィンドレー大学の学生が演じるのは、シェイクスピアの *The Comedy of Errors* という喜劇です。物語の舞台は **Ephesus** という、貿易や商業が盛んな古代ギリシャ都市。主人 **Antipholus** と従者 **Dromio** が、小さい頃に船の難破で離ればなれになったそれぞれの双子の兄弟を探しに **Syracuse** という都市から **Ephesus** にやって来ますが、ここで双子の取り違えが度々起こり、町の人々を巻き込んだ騒動へと発展します。この作品は、紀元前 200 年頃のローマの劇作家 **Plautus** の *The Menaechmi* という劇をもとにして書かれたものです。シェイクスピアは、様々な文学作品や歴史をもとにして彼自身の複雑で巧みな作品群を作り上げたと言われています。

ショーのリハーサルは約 1 ヶ月、毎日夜 7 時から 10 時頃まで行われました。全部で約 1 時間半という、シェイクスピア作品の中では比較的短いこの作品は、いくつかのシーンに分かれています。リハーサルは、まずはシーンごとに基本的な動きを掴むことから始まりました。舞台のどこから入場してどこへ退場するか、どこに立って会話するか、いつどのように近づくか、誰の隣に立つか。その後、役者とディレクターが様々な“実験”を繰り返すことで少しずつシーンが生き生きとしてきます。最後の約 1 週間は、音響や照明、衣装、メイクを本番同様に合わせ、劇の最初から最後まで通して微調整を行いました。ウィッグがずるりと落ちたり、ドレスの肩ひもが切れたり、ドアノブが落ちたりと小さいハプニングが多々あり、また終始緊張して疲弊していましたが、楽しく充実したリハーサルでした。

印象的だったディレクターの言葉があります。

「リハーサルで正しい演技をしようとするな。正しい演技だけをしようとする、さらにいい演技の可能性を失う。」私にとっては人生で初めての演技だったので、この言葉を聞く前は何が正しいのか分からず、事前に鏡の前で練習した一つの型に固執しようとしていました。しかしよくよくリハーサルを見てみると、確かに経験豊富な役者は、シーンを練習する毎に全く異なる表情や動きを見せたり、キャラクター同士の関係性を変えたりしています。ある日は威嚇するような顔でトランクを抱えて後ずさるかと思えば、



劇の冒頭の Street Performers（舞台）裏



図書館前の紅葉

次の日は狂ったように笑いながらトランクを引きずって走り去る。ある日は女主人に怯えているかと思えば、次の日は大嫌いになっている。彼らの演技は同じものは一つもなく、何度見ても飽きることはありませんでした。私も彼らを見習って、毎回新しい演技に挑戦するよう心がけました。

これから 4 日間、本番を思いきり楽しみたいと思います。

本報告書についてご質問、感想等ありましたら以下のメールアドレスまでご連絡ください。

shimadas1@findlay.edu



Findlay の町のハロウィンパレード

2021-2022 フィンドレー大学福井県奨学生 月例報告書 11 月

作成者: 島田 園子

作成日: 2021 年 12 月 10 日

12 月初旬に秋学期が終わり、冬休みに入りました。今回の報告書では、11 月に行われたシェイクスピアの舞台、演劇の **Directing** の授業、そして感謝祭について書きたいと思います。

10 月から約 1 ヶ月半のリハーサルを経て、11/11～11/14 の 4 日間、シェイクスピアの *The Comedy of Errors* が上演されました（劇の内容、リハーサルの詳細は 10 月分報告書に記載しました）。友人達、お世話になっている川村先生をはじめとして、毎日たくさんの方が観に来てくださいました。シェイクスピアの古い英語は現地の人にとっても簡単ではないのですが、個性豊かなキャラクター達のドタバタ騒動や下品な冗談に何度も笑いが起きているのを、舞台裏でしめしめと思いながら聞いていました。四つん這いになって地面を這う従者のお尻を女主人がぼこんと蹴ったり、祈祷師が奇声を発しながらお祓いをするシーンなどは、脚本にはないオリジナルの演出で、役者が自ら編み出したものです。4 日間毎日、最大限のエネルギーを演技に注ぐのは大変でしたが、この 4 日間の中でも尚変化を見せていく他の役者を見て、私もステップアップしていこうと励まされ、何とか本番を走り抜けました。



上の写真は、学生の一人が手掛けた舞台セットです。ドタバタ喜劇ということで「コミック」をテーマにデザインされています。衣装は、フィンドレー大学の Theatre Program で何年間も衣装を担当しているキャシーという女性がデザイン・製作を手掛けました。劇が形作られていく過程で、役者達の表現の変化や、ディレクターの様々な挑戦を目の当たりにし、自分もその中で共に挑戦できたことは、とても貴重な学びとなりました。また、脚本ではなく舞台の上で繰り広げられるシェイクスピアの世界の面白さを知ることができたことも大きな収穫です。



The Comedy of Errors には役者として関わりましたが、**Directing** の授業では、ディレクターとして 10-minute play という約 10 分間の演劇の演出を行いました。10-minute play はここ数十年で人気が高まっている演劇のジャンルで、フェスティバルやコンテストも開催されているようです。教授が私たち学生 4 人に 10-minute play のコレクションを何冊か貸して

くださり、その中から自分が演出したい作品を選びました。コレクションの中には人種差別をテーマにしたシリアスなものから、爆弾の爆発で終わる衝撃的なものまで、様々な作品がありましたが、私は読みながら思わず何度も笑ってしまった *The Craft* というコメディーを選びました。互いを忌み嫌う男女の役者が陳腐なロマンスを演じるという劇中劇で、台詞は全て役者の心の声です。

例えば右の写真のシーンは一見、プロポーズで婚約指輪の箱を開けた瞬間ですが、実際の彼らの台詞は、「(男) 空っぽ?」「(女) この間抜け!」といった具合です。

この Directing の授業では、小規模ながらもオーディションでキャストを決め、リハーサルのスケジュールを立て、各グループでリハーサルを行い、



最後の授業で劇を発表しました。リハーサルは基本的に私と役者 2 人だけで、2 人に演じてもらい私が意見を伝えることの繰り返しでした。「何かが違うことは分かるが、具体的に何が正解か分からない」という状況が多く、とにかく思いついた案を伝え、うまくいくかどうか分からないけれど試してもらっていました。2 人とも非常に経験豊富な役者で、私の大まかな意見を汲み取り、私のイメージ以上の素晴らしい演技を見せてくれました。ディレクターが一方向的に指示するのではなく、役者と協力して劇を作っていくことが重要だと実感しました。本番では客席からの笑いもあり、同じ授業を受けている友人達も「とてもよかった」と言ってくれて、本当に幸せでした。

感謝祭の休み (Thanksgiving Holiday) 5 日間は、友人アビーの実家で過ごしました。フィンドレーから約 6 時間、アビーの運転でイリノイ州の町に入り、素敵なオレンジ色の屋根の家に着くと、にわとりが一斉に庭先まで出迎えてくれました。

アビーのお母さんターニャはとてもエネルギーが豊富な方でした。ジャムやサルサソース、乾燥ハーブなど何でも手作りで、毎日私たちと一緒ににわとりの卵を集め、



エサやりをさせてくれました。感謝祭のご馳走はもちろん、朝ごはんのパンケーキや取れたての卵で作るエッグキャセロールなど、彼女の作る料理はどれも本当に素晴らしかったです。大食の国アメリカにいて忘れかけていた食べ物へのありがたみを思い出しました。夜はカードゲームをしたり、私が一番好きな映画「高慢と偏見」を毎日少しずつ観たりして過ごし

した。アビーのお父さんやおばあさんもとても温かい人たちで、家族への深い愛情がひしひしと伝わってきました。「家族への愛情をはっきり表現するんですね。」とターニャに言うと、「アメリカでも個人差はあるけれど、私は愛情をはっきり表現する家で育ったから。」と言っていました。彼らの素直な愛情表現は、見ているこちらまで温かい気持ちにさせてくれました。

今は冬休みの計画を立てています。約1ヶ月間、存分にアメリカを探索したいと思います。

本報告書についてご質問、感想等ありましたら以下のメールアドレスまでご連絡ください。

shimadas1@findlay.edu



作成者: 島田 園子

作成日: 2021 年 1 月 10 日

約 1 ヶ月の冬休みが終わり、春学期が始まりました。今回の報告書では、冬のアラスカ旅行について書きたいと思います。

旅行先にアラスカを選んだのは、アラスカを撮り続けた写真家、星野道夫さんの本がきっかけです。星野さんの、厳しくも豊かなアラスカの自然の中での撮影の記録は、読んでいる私にも音や空気や匂いがくっきりと感じられるようでした。厳冬期のアラスカ山脈での 1 ヶ月に及ぶキャンプ生活で撮影した、北米最高峰デナリ山とオーロラ。轟音をたてて崩れ落ちる氷河に囲まれた、カヤックの旅。北極圏に生きるアラスカ先住民のクジラ漁。彼の描くアラスカを想像していると、自分の存在がなんともちっぽけなものに思えます。

飛行機の窓から外を覗いていると、ぼんやりと遠くに白い山が見え始め、たちまち無数の真っ白な山々が姿を現しました。建物は一切見えず、人間を容易に寄せつけない自然の厳しさを感じます。しばらくして、飛行機はアラスカ最大の都市アンカレッジに到着しました。その日偶然にも、アンカレッジで日本料理屋を営む日本人の店長にお会いしました。40 年近くアラスカに住んでいるそうで、アンカレッジは昔、日本からの航空機の燃料補給地だったため、料理屋には日本人の客がたくさんいたとのことでした。店長は、アラスカや日本など様々な話をする中で「日本人は心だ。"誰かのため"に行動するのが男だ。」とおっしゃっていました。個人の権利や自由を追求するのが当たり前の現代に生きてきた私にとって、店長の言葉はとても新鮮なものに映りました。何が正しいのかは分かりませんが、店長にはぶれない軸、強い芯のようなものがあるように感じられました。

まだ日の出前の真っ暗な午前 9 時、アラスカ南部の都市アンカレッジと、内陸部の都市フェアバンクスを結ぶアラスカ鉄道に乗りました。「冬のアラスカ鉄道には、観光客は一人もいない」と 1980 年に星野道夫さんは書いていますが、私が乗ったアラスカ鉄道の中は、オーロラを見に来たアジア系の観光客でいっぱいでした。午前 10 時頃、ようやく夜が明け始めました。外には、雪をかぶった真っ白なトウヒの木々が遙か向こうまで広がっていました。時々ムースが見られ、その度に車掌さんが「ムース！」と叫んで教えてくれました。コヨーテらしき小さな群れが走り去る



姿も見られました。しばらくすると、駅も何もない場所で電車が停まりました。何事かと思って外を見ると、木々の間からスノーマシーンに乗った女性が現れました。途中下車する家族を迎えに来ていたのです。電車から降りた乗客は、スノーマシーンの後ろに結ばれた橇に荷物を載せ、自分は家族のすぐ後ろに乗って、木々の中の家の方へ消えていきました。クリスマス休暇で久々に家族と会ったのだろうか、と勝手に想像しながら、何やら暖かい気持ちになりました。こんなところで生活している人があるのかと無性に気になり、車掌さんにここはどこかと尋ねると、「Chase というところだよ。道路がないから、アラスカ鉄道かスノーマシーンしか交通手段がないんだ。電気も通っていないから、ソーラーパネルで発電しているんだよ。」と教えてくれました。都市から遠く離れた雪深い自然の広がりの中に立つ家。そこでの暮らしはどのようなものなのか。この光景は、アラスカ旅行の中で一番深く心に残りました。



冬にはマイナス 40 度にもなるというフェアバンクス。ここは、アラスカのゴールドラッシュや石油パイプラインにより栄えた都市です。凍りつく寒さを覚悟して行きましたが、福井県の冬とそれほど変わらない寒さで、拍子抜けしてしまいました。私が滞在していたホテルには、ロサンゼルスやペンシルバニア、オーストラリアからの旅行者に加え、アラスカ出身の方も様々な理由で短期滞在していました。ある男性はアラスカ南部のコディアック島出身で、アラスカの西や南の海で漁業を行ったり、北極海にほど近いノーススロープという地域で高速道路の建設に携わったりした経験があり、いくつか写真を見せてくれました。小さな漁船の上からの夕日や、どこまでも続くツンドラの写真は、星野さんが歩いたアラスカを思わせるものがありました。ただの旅行者ではなく、そこに生活を懸けている人たちだけが見られるものなのだろうと思いました。

最後に、Seward というアラスカ南部の港町に行きました。アラスカの内陸部や西部でゴールドラッシュがあった時代、氷に囲まれない湾を持つ Seward はアラスカ内陸部と外の世界を繋ぐ重要な地域だったそうです。夏は観光クルーズ船がひしめくという Seward ですが、冬はオフシーズン。町には時たま雪掻きをしている人いるだけで、観光客らしき人は一人もいません。めずらしくオープンしているレストランで夕食を食べ、その店長とお話をしました。冬は観光業の人はどうしているのかと聞くと、カリフォルニアに行くか、ここらへんのバーで飲んでいるよ、と言っていました。メキシコ出身という店長は、アラスカに住み続けたいかと聞くとこう答えました。「まさか。寒すぎるよ。アラスカは労働者に人気がなく

て賃金が高いから、稼ぐために2年くらい働いてメキシコに帰るつもりだ。」

アラスカに家建てて一生暮らしたいという人もいれば、稼いで故郷に帰りたいという人もいる。当たり前ですが、アラスカで暮らすということについて人それぞれの見方があるのだなと感じました。

店長が面白いことを教えてくれました。Seward に日本人の銅像があるということです。翌日散歩をしていると、確かに日本人の銅像が立っています。Jujiro Wada というその人物は名の知られた犬ぞり運転手で、その昔、Seward とアラスカ内陸部を結ぶ犬ぞりの経路の建設に貢献したそうです。当時はその経路の唯一の交通手段である犬ぞりによって、郵便物や物資が内陸部に運送されていたよう



です。内陸部で病気が流行した際には猛スピードで犬ぞりを走らせて医療物資が届けられたというエピソードも残っています。まさか Seward で日本人の銅像を見ることがになるとは夢にも思わず、誇らしい気持ちになりました。

今回のアラスカ旅行では様々な人と出会いました。いかに自分がこれまで小さな世界、狭い慣習の中で生きてきたかを痛切に感じました。同時に、どこか夢の世界のように想像していたアラスカでも、そこで暮らす人々は、私たちと同じように何かしら苦悩を抱えながら日々を生きているということを知りました。今は、今回の旅で知ることのできなかったアラスカの奥地の自然、先住民の暮らしや歴史について、もっと知りたいと強く思っています。春学期は、アメリカ史、川村先生のご専門である文化人類学を勉強して、アラスカにより近づきたいと思います。そして、いつかまた違った形でアラスカに戻りたいです。

本報告書についてご質問、感想等ありましたら以下のメールアドレスまでご連絡ください。

shimada@findlay.edu

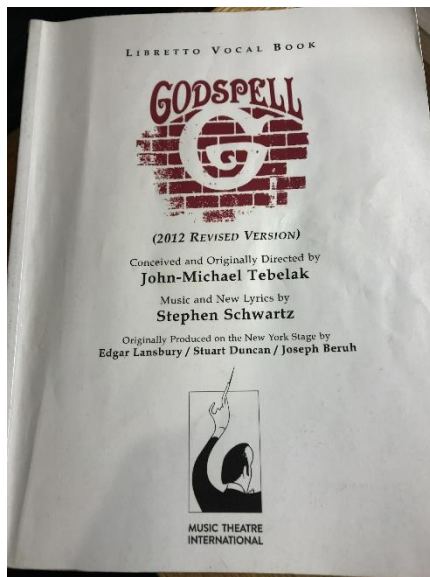
作成者: 島田 園子

作成日: 2022 年 2 月 10 日

2月に入り、ようやく雪らしい雪が降りました。こちらの雪は、福井の濡れた雪とは違って、まさにパウダースノウです。細かい雪が吹き荒れるスノウストームが起こり、大学が2日間休校となりました。福井で育った身としては、この程度（積雪約 20cm）で休校になるのかと不思議でしたが、現地の人にとってはこれまでにない大雪だったようです。彼らによると、道路の融雪システムが整っておらず、遠くから車で出勤してくる先生たちを配慮しての休校とのことでした。シェアハウスの2階の窓から外を覗くと、何やら嬉しそうに道を歩く 4、5 人の若い集団がいます。すると彼らは、そりを車の後部に結びつけ、車道で車を走らせ始めました。その上の人々が歓声をあげています。驚きの光景に、車が見えなくなるまで呆然と窓から見送りました。しばらくして向こうから車が走ってくるのが見えました。またもや、そりを牽引しています。これはアメリカならではの光景なのではないでしょうか、それとも私が知らないだけで日本でも見慣れた光景なののでしょうか。いずれにしても、「雪が降ったらそり」というのはどうやらこちらの人にとってお決まりのようです。授業では、先生の「みんな今週そりをするか」という質問に、多くの学生がすると答えていました。



Theatre Program 春学期のプロダクション「Godspell」というミュージカルのリハーサルが始まりました。月曜日から金曜日まで毎日夜 7 時から 10 時まで、歌、ダンス、演技に分けて稽古しています。このミュージカルのオリジナル公演は 1971 年で、それから何度もリバイバル公演を経てきたようです。現代を悩みながら生きる若者達のもとにイエス・キリストが現れ、様々な教を説きながら彼らをよりよい生き方へと導く、というストーリーです。私にとってこのミュージカルの難しいところは、抽象的な表現が多いことです。若者たちがキリストの例え話を体現する、いわゆる劇中劇のようなシーンが多いのですが、例え話が変わる度に自分の役割もどんどん変わっていきます。時間も、聖書の時制と現代の時制が交錯しており、正直リハーサルでは毎回頭が混乱しています。秋学期に学んだことですが、多くのディレクターは「こう動いてほしい」と役者に伝えますが、その理由は教えてくれません。脚本の台詞も同じこと



です。そう動く理由、そう話す理由は役者が自分で見つけなければいけません。このミュージカルに関しては、宗教的な意味など理解できていないことがまだまだ多いので、勉強をして、意味のあるパフォーマンスをしていきたいと思います。

春学期は、新しくアメリカ史の授業を受け始めました。大国となったアメリカが辿ってきた道を勉強することは思いのほか面白いということに気づきました。中学、高校時代の歴史の勉強は、教科書に載っている出来事と年代を暗記するような浅いものでしたが、ここでは当時撮影された写真や書記を読み、誰が何のためにそれを残したのか、

そこにはどのようなバイアスが存在するのかを常に考えます。南北戦争後に解放された黒人奴隷が元主人に充てた手紙や、西部開拓を経験したカウボーイの妻の回顧録などは非常に興味深く読みました。特に後者の回顧録は、広大な土地で一から生活を築き上げる著者の喜びと同時に、容易に他人の助けを借りられない孤独、ネイティブアメリカンとの確執などが生々しく記されており、とても印象的でした。

先日は、大学の所有しているホールでミュージカル俳優の方のコンサートがありました。レ・ミゼラブルやオペラ座の怪人など数多くのミュージカルに出演してきたそうで、彼のパフォーマンスは人を引き込むものがあり本当に素晴らしく、コンサート後は幸せな気持ちでいっぱいになりました。そのとき、自分のミュージカルに対する愛着が、高校1年生の時に母とニューヨークで初めてブロードウェイミュージカルを見た時から始まっていることを思い出しました。見た人をこれほど幸福感で満たしてくれるミュージカルが、やはり大好きだと改めて思いました。

留学は残り3ヶ月。これからの人生のステップとなるように、日々挑戦し続けてきたいと思っています。

本報告書についてご質問、感想等ありましたら以下のメールアドレスまでご連絡ください。
shimadas1@findlay.edu

2021-2022 フィンドレー大学福井県奨学生 月例報告書 2月分

作成者: 島田 園子

作成日: 2022 年 3 月 9 日

3 月、ここフィンドレーは少しずつ暖かくなってきて、春の訪れを感じます。留学生活も残り 2 ヶ月となり、その間にやりたいこと、留学後の進路などをこれまで以上に考えながら日々を送っています。

●春休み（2 月終わってから 3 月初旬）

12 月にアラスカで出会ったドイツ人のキャスリンと、ナイアガラ滝を見に行く約束をしていたので、ナイアガラからほど近いバッファローという街で彼女と落ち合い、二人旅をしました。バッファローはニューヨーク州で 2 番目に大きな街で、ナイアガラ滝への玄関口です。

フィンドレーからバッファローまでの移動は中々骨の折れるものでした。フィンドレーには電車が通っていないため、フィンドレーの北に位置するトレドまで友人に車で送ってもらい（約 50 分）、トレド駅から数少ない電車で朝 3 時頃乗り込み、5 時間ほど電車で揺られてバッファローに到着しました。驚いたことに、アメリカの地方の鉄道サービスは、日本と比較して発展していないようでした。トレドにもバッファローにも自動改札機ではなく、電車はどこか無骨で内装も無機質な灰色です。“BUF”（Buffalo）と手書きで書かれた小さな紙を駅員さんから受けとり、それを自分の座席の上に見えるように差し込み、目的地に着く直前に時に駅員さんが見回りに来て、寝ている私を起こしてくれるというシステム。原始的なようですが、寝ている乗客を起こしてくれるサービス精神は、良い意味でアメリカらしくないように感じました。



無事バッファローでキャスリンと再会し、ナイアガラ滝を見ることができました。滝の壮大さは言うまでもないですが、川の水が怒濤の勢いで滝に向かって流れていく様子は圧巻でした。

次の日は、バッファローから車で約 1 時間南下して、Allegany Reservation というネイティブアメリカンの居住地に行きました。今学期、アメリカ史や文化人類学の授業を受けるうちに、ネイティブアメリカンに対して自分が抱いていた理想化されたイメージと食い違うような、貧困やアルコール中毒、薬物中毒など厳しい状況が見え始めていたため、自分の目で一度確かめてみたいという思いがありました。Allegany Reservation は、Seneca という先

住民族が自治する居住地です。居住地は、大手の薬局やチェーン店もあり、一見普通の小さな町のように見えました。町の端には、先住民にとって大きな経済資源であるカジノが建っています。小さな住宅街を歩くと、教会のような建物の窓ガラスが割れていたり、明らかに老朽化した建物など、活気こそあまり感じられませんでした。居住地以外の場所との明らかな違いは見られませんでした。たまに見かける人々は白人がほとんどだったと思います。居住地の中心部から外れた周辺には、茶色い草が繁る土地が果てしなく広がり、時折住居や牛の群れを見かけました。



Allegany Reservation の住宅地

植民地時代から土地を追われ続けてきたネイティブアメリカンは、西洋文化への同化の強要、部族の消滅など、厳しい時代を生きてきたといえます。Indian boarding school（インディアン寄宿学校）はその流れの一つで、ネイティブアメリカンの子供達を家族から離し、彼らが部族の言葉を話すことを禁じることで"アメリカ人"へと同化させようとしたものです。部族の言葉や伝統を失い、家族の安定が崩れた若者達は、アルコール中毒や薬物中毒、失業、家庭内暴力に陥る傾向にあり、それは Indian boarding school が廃止された今でも依然として問題となっているそうです。また貧困率が非常に高くファストフードに頼りがちであること、医療サービスの不足などから、糖尿病や心疾患などの生活習慣病の罹患率が他の人種と比較して非常に高いという問題もあります。

今回 Allegany Reservation を訪れることができたことは、先住民や居住地に対する自分の見方を変える貴重な経験となりました。アメリカには数百の部族があり、実際には多くのネイティブアメリカンが都市部に暮らしているようで、まだまだ未知なことが多くありますが、これからも特に医療問題についてより理解を深めていきたいと思っています。

●友人のバースデーパーティー

先日、ティアという友人の誕生日だったので、古市さんと手巻き寿司を作ってお祝いをしました。手巻き寿司と一緒に出したのは、アメリカではお馴染みという、セロリのピーナツバター（レーズンのせ）です。これは、看護師による小学校の食育の授業を見学した時に、子供達から教わりました。私が子供の頃に経験した食



育の授業でも野菜の栄養について教わりましたが、ここでの食育の授業では栄養だけでなく、どのように調理したら美味しいかなど、野菜の美味しさを伝えているように感じました。実際、この授業見学後から、これまでよりも野菜を食べたいと思うようになりました。

残り2ヶ月、悔いの残らないよう精進したいと思います。

本報告書についてご質問、感想等ありましたら以下のメールアドレスまでご連絡ください。
shimadas1@findlay.edu



凍ったエリー湖（五大湖の一つ）

作成者: 島田 園子

作成日: 2022 年 4 月 10 日

留学生活も残り 1 ヶ月弱となりました。フィンドレーで桜を見かけないのは物足りない気持ちですが、最近少しずつ春らしい草花が顔を出してきています。今回の報告書では、ミュージカル公演、そして産婦人科学会の参加について書きたいと思います。

●ミュージカル “Godspell”

3 月 25 日から 3 日間に渡る公演が、ようやく幕を閉じました。今回の公演は大学所有のシアターではなく、Marathon Center というフィンドレーのコミュニティーシアターで行われました。バルコニー席もあるような素敵な劇場です。



1 月からほとんど毎日リハーサルをしてきたので、終わってしまいとても寂しい思いです。リハーサルを始めた頃は、他のキャスト達の素晴らしい歌声に圧倒され、自分の無能さに落ち込んでいましたが、youtube を参考にした試行錯誤の自主練（いいのかどうかは分かりませんが）と、キャスト達や先生方の温かい声援の甲斐あって、最終的には自信をもってパフォーマンスをすることができました。歌詞とダンスを覚え、かつ同時平行することは皆最後まで苦労していましたが、習得してからは一気にパフォーマンスが花開くのを実感しました。

この “Godspell” というミュージカルでは、イエス・キリストの信者達の名前はキャストの本名を使うという特殊なものでしたが、不思議なことにどのキャラクターもキャスト自身の人柄とうまく合い、このキャスティングでしか Godspell は成り得ないと感じたほどです。ばらばらだった若者達が、イエス・キリストの教えに導かれ、少しずつコミュニティーを形作っていく。そのストーリーの通り、キャスト達との距離も少しずつ縮まったように感じました。才能と魅力溢れるキャスト達とともに Godspell の世界を生きることができたのは、最高の喜びです。



●産婦人科学会

シカゴで 3 日間開催された産婦人科学会 The North American Society for Pediatric and Adolescent Gynecology (NASPAG)に参加しました。オハイオ州から電車で約 4 時間、シカゴ

のユニオン駅を出ると、想像を絶するほど立派な建築が所狭しと聳え立っていました。

この学会は名前の通り、小児から若い世代を対象とした婦人科の学会で、避妊、月経、性教育、がん治療等を受ける若者の不妊予防、COVID19 が子供や不妊患者に与える影響など、多岐にわたるプレゼンテーションを聞くことができ、大変勉強になりました。プレゼンターは、アメリカ各地から集まった小児科医や小児専門の産婦人科医です。興味深いと感じたプレゼンテーションの中には、社会的に抑圧されてきた黒人やヒスパニック、ネイティブアメリカンの避妊問題がありました。彼らは歴史的に、人口抑制のための強制的な不妊手術や避妊薬の実験の対象とされてきており、避妊に対するトラウマ的感情が現代における避妊率の低さ、若者の望まない妊娠率の高さの一因として考えられているそうです。対策として避妊薬へのアクセスを高めようとする動きがあるようですが、彼らの平均的な収入の低さが壁となっているとのことでした。



もう一つ印象に残ったのは、精神科医の先生による、医療者の自身の心のケアについてのレクチャーです。COVID19 流行のような厳しい状況の中で最前線に立つことを求められる医療者は、患者へのケアに明け暮れ、しばしば自身の心を病んでしまう。自分の心、感情を見つめ直し、自分にとって最適な立ち位置を見つけることが重要だ、と先生はおっしゃっていました。外からの雑音をシャットダウンし、自分の心の声を聞く。自分の一生がもうすぐ終わるとしたら、何をするか、誰といるか。先生のレクチャーは、自分の大切なものを見つめ直すことを教えてくださいました。



残り少ない留学生活、悔いの残らないように精一杯努力して参りたいと思います。この貴重な留学を支えてくださっている全ての方に、心から感謝申し上げます。

本報告書についてご質問、感想等ありましたら以下のメールアドレスまでご連絡ください。

shimadas1@findlay.edu



2021-2022 フィンドレー大学福井県奨学生 月例報告書 4月分

作成者: 島田 園子

作成日: 2022 年 5 月 10 日

とうとう最後の留学報告書を書く時が来てしまいました。この 10 ヶ月間の貴重な経験を支えてくださった全ての方に心より感謝申し上げます。まずは普段通り、4月の活動のご報告をさせていただきます。4月は、オハイオ州の2つの病院見学、デトロイト総領事ご夫妻との面会、米国産婦人科学会への出席などの他に、友人達とのカレーパーティーや Japanese Culture Club のお別れ会など、忙しくも充実した月となりました。

●病院見学

3月にはフィンドレーの中核病院である Blanchard Valley Hospital を見学しましたが、オハイオ州の大病院も見てみたいという気持ちがありました。そこで、フィンドレー大学のクリス先生や Blanchard Valley Hospital の Dr. Kose に相談したところ、オハイオ州の州都である Columbus にある、Ohio State University (OSU) の medical center と、OSU の小児部門を担う Nationwide Children's Hospital を古市さんと一緒に訪問させていただけることになりました。どちらも日本では中々見かけないほど大規模な病院で、立派でファッショナブルな建物がいくつも隣接し、さらにまた新たな建物が建設中でした。Nationwide Children's Hospital の方は病院の至るところにウサギやビーバーなどの動物の像が座り、壁一面に色とりどりの自然が描かれ、床はきらきらと輝き、まるでディズニーランドのようでした。あまりの豪華さに、見た目以外のところにもっとお金をかけた方がいいのではないだろうか、とさえ思っていました。

感染対策のため患者さんのいる病棟や外来は見学することができませんでしたが、患者さんのいない精神科病棟の部屋やお祈りをする部屋、患者さんの家族や子供達がくつろぐスペースなどを見せていた



だき、さらに小児科、産婦人科、精神科やプライマリケアの医療者の方々とお話をさせていただきました。どなたも私たちの質問に非常に丁寧に答えてくださり、学びの多い病院見学となりました。これまでの病院見学や学会、そして留学生活全体を通して感じたことですが、やはりアメリカでは人種による医療格差が非常に大きな問題となっているようです。低所得者用の医療保険に入っていない貧しい患者は、医療費を払えないため、病院は無料で医療を提供することになってしまうこともあるそうです。アメリカの医療も日本の医療も、それぞれ別の形で厳しい現実と直面していると感じました。

●デトロイト総領事ご夫妻との面会

デトロイト総領事、進藤様ご夫妻が、デトロイトからはるばるフィンドレー大学に訪ねてきてくださいました。とても素敵なお夫妻で、大学内のカフェテリアでコーヒーを飲んだり庭を散歩したりしながら、私たち留学生の話に熱心に聞いてくださいました。ご夫妻はこれまでにアメリカの西から東まで各所でお仕事をされてきたそうで、そのご経験から見てもデトロイトやフィンドレーの位置するアメリカ中西部は人が全体的に優しく過ごしやすいとおっしゃっていました。アメリカの各所で、移民に対する態度というのは大きく違うそうです。私は旅行でアメリカの西も東も行ったことがあり、当時は差別などは感じませんでしたが、やはり長期間家族で住むとなると様々な壁に突き当たるのだらうかと思いました。何はともあれ、フィンドレーは田舎ですが外国人の私たちにとってはとても恵まれた環境だったのだと改めて気づかれました。

●友人達との集い

カレーライスパーティーを開いてくれたのは、何とアメリカ人のイーサンでした。日本に留学中はしょっちゅうカレーライスを作って食べていたという彼。大鍋のカレー、炊飯器いっぱいのご飯、さらに大量の手作り餃子まで振る舞ってくれました。皮まで手作りです。10人以上のお客さんの中には初めて会う学生もいましたが、みんなでワイワイ料理とおしゃべりを楽しみました。そこですぐ、翌日ハイキングに行くことが決まり、早起きして洞窟や滝、池のある美しいハイキングトレイルを満喫しました。



学期末には、川村先生、青木先生が Japanese Culture Club のお別れ会を開いてくださいました。集まったのはこの Club でお馴染みのメンバー達、みんな何らかの形で日本が好きな学生で

す。ピザの他に川村先生お手製のお餅（きなこ醤油）が振る舞われ、日本人留学生がスピーチをしたり、ゲームをしたり、カラオケをしたりと、とても楽しい夜でした。みんな日本に関心があるからでしょうか、彼らとすると特に居心地が良く、ほっとした気分になります。今年から日本に留学する学生も数名おり、お別れという気持ちは正直あまりなく、絶対にまた会えると思っています。



●最後に

この留学では、留学前には想像もしていなかったほど様々な人と出会い、様々なことに挑戦することができました。フィンドレー大学でずっと支えてくださった川村先生と青木先生、綿谷様を始めとする福井県国際交流協会の皆様、家族、友人達に心から感謝いたします。この留学で得たご縁を、これからも大切にしていきたいと思います。



本報告書についてご質問、感想等ありましたら以下のメールアドレスまでご連絡ください。

shimadas1@findlay.edu

2021-2022 フィンドレー大学 福井県奨学生 修了報告書

島田 園子

この留学での経験は、行く前に想像もしていなかったことばかりでした。留学前の、「医師として働く前に、以前から興味があった演劇の裏方をやってみたい」という漠然とした思い。いざ留学を始めると、授業時間の都合上 technical theatre (音響・照明など)の授業は取れず、Acting (演技)の授業はもちろん取るだろうと川村先生に引っ張られる形で始め、「シェイクスピアのオーディション来るよね？」と演劇史の先生にまたもや引っ張られ、自分でも驚いたことに役者として舞台に立つことになりました。そこからシェイクスピアの劇やミュージカル、また私が演出した 20 分間の劇を通して、演じる難しさ、他の役者達のどんどん変わっていくパフォーマンスを間近で見る感動、わけのわからない脚本が演技により命を吹き返す瞬間、そして観客が笑ってくれる喜びなど、これまでの人生で味わったことのないものを知りました。演技、演出、歴史と奥が深い演劇は 10 ヶ月ではとてもやりつくせず、これからも何らかの形で携わっていきたいと思っています。

想定外だったのは演劇だけではありません。アラスカでの様々な人生を歩む人たちとの出会い、アメリカの医療者たちとの交流、そしてユニークなフィンドレーの仲間たち。もともとあまり社交的ではない性格の私にとって、オープンで面白くて日本文化に興味をもってくれている友人達の存在はとても大きく、一緒に心から笑い合えたことは本当に嬉しかったです。また新しい家族との出会いもありました。フィンドレー留学後、ロサンゼルスに住む日系アメリカ人の親戚夫婦を訪れました。彼女達に会うのはそれが初めてでした。アメリカで生まれ育った彼女は日本語をほとんど話せませんが、どこか私の祖母の面影と大阪的な気質も感じられ、古い写真と一緒に見ながら「生きてきた国は違うけれど、家族なんだな」としみじみ感じました。大切だと思える家族が増えたような、満たされた気持ちになりました。

日本に戻ってきた今、アメリカの良いところを改めて考えてみました。まず英語にはいわゆる敬語というものが無く、年齢や学年関係なく仲良くなったり意見を言いやすいこと。またホームスクールなども珍しくないアメリカには、様々な学歴やキャリアの人がおり、私が日本で医学を学んでいたが留学中は演劇をしていると言ってもあまり驚かれず、「い

いね！」と言われることが多かったことを覚えています。あとはやはり世界中から集まった人たちと交流できることが大きな魅力で、アフリカ人の友人から聞く一夫多妻制の話や、インド人の友人から聞くカーストと恋愛・結婚の話はとても新鮮で興味深く、アメリカにいてよかったと心から思いました。逆に日本で生まれ育って幸運だと思うことも多くありました。ニューヨークなどの大都市以外は電車があまり発達しておらず、またトイレはどこも最低限の設備で、アメリカもまだまだ発展途上だと感じました。マリファナが合法のアラスカでの友人の話からは、薬物依存に苦しむ知人との関係維持の難しさを知りました。繰り返される銃撃事件はアメリカのイメージをどんどん下げます。こういった点も含め、今回の留学でアメリカに住むということがどういうことかを少しでも知ることができてよかったと思います。

この素晴らしい機会をくださった福井県国際交流協会の皆様、フィンドレー大学の先生方、支えてくれた家族と友人達に心から感謝申し上げます。この留学経験を必ず活かしていきたいと思います。本当にありがとうございました。